

保育現場における幼児期の話し言葉の意義と機能 ——保育文脈内言語である「保育実践ジャーゴン」の分析から——

菅井 洋子*

A Study of the Significance and Function of Spoken Language in Early Childhood Care and Education An Analysis of the Language in the Context

Yoko SUGAI

要 旨

本論文では、保育現場における幼児期の話し言葉の意義と機能について、保育文脈内言語である「保育実践ジャーゴン」を分析することにより、領域「言葉」との関連から探ることを目的とした。保育現場で実習を経験した学生の振り返りシート（保育実践ジャーゴンに関する記述）を検討した結果、保育実践ジャーゴンが出現する頻度の高い場面（「食事」「活動」「整列・移動」場面）が示唆された。各々の場面の保育実践ジャーゴンの意味や機能、事例を詳細に検討した結果、場面により相違はみられるが、全体として保育現場において子どもの文脈を新たな文脈へ置き換える際（「文脈置換」）に、保育実践ジャーゴンが話し言葉として重要な機能を果たすことが多いことが明らかにされた。また、保育実践ジャーゴンは、コミュニケーションを成立させる鍵となる保育者の発話であるのみならず、子どもの発話にもなることが新たにみいだされた。これらの結果をふまえ、保育現場における幼児期の話し言葉の意義と機能について、領域「言葉」との関連から考察し、今後の研究の展望を述べた。

キーワード：話し言葉、幼児期、領域言葉、保育実践ジャーゴン、集団

問題・目的

平成29年に告示された新幼稚園教育要領、新保育所保育指針、新幼保連携型認定こども園教育・保育要領における領域「言葉」では、「3歳以上児の保育に関わるねらい」の(3)に「言葉に対する感覚を豊かにし」という文言と、これに関連して「内容の取扱い」の(4)「幼児が

*准教授 発達心理学・幼児教育学・保育学

生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現に触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」が新設された。「言葉の感覚」とは、言葉の響きやリズムに敏感になることであり、そのためには一語の意味を保育者が説明し、それを理解するというよりは、実際に使ってみて、言葉の楽しさに目覚め、そこで意味を何となく感じ取りながら、言葉の微妙なニュアンスや音の響きに気づくようにすることであり、そういう感覚がもとになって言葉の理解が広がり、コミュニケーションにも使えるようになっていき、小学校以降の国語の教育の基礎が培われるという（無藤・汐見・砂上，2017）。

園生活の中で幼児は、保育者や同年齢、異年齢の子どもたちと集団で生活するため、家庭生活ではあまり使わない言葉を使用することがある。例えば、「先生」「クラス」「〇組」「みんな」ということは入園して初めて耳にする可能性のある言葉である。そして生活のみならず遊びの中では、「順番」「交代」「かして」「いいよ」という表現がよく用いられるが、これらの言葉や表現がわからないと遊びを楽しく展開できないこともある。このように、「集団」で生活や遊びを進めていくうえで必要な言葉は多くあるため、子ども自身がその意味に気づいていくことができるよう一人ひとりの姿をふまえて保育者が援助していくことは重要なことであるといえる。

また、家庭や小学校以降の教育現場において耳慣れない話し言葉が、保育現場の幼児期のやりとりの中で聞こえてくることがある。例えば、食事場面での「お手でバッキューンだよ！」という言葉等である。幼稚園や保育所等で実習を終えた学生の中には、このような言葉に出会ったときに一瞬躊躇することもあるようだが、実習中にお箸の持ち方を子どもたちにわかりやすく伝える表現であることに気づき、子どもたちにどのように表現したら伝わるのか、保育現場特有の幼児と関わる際の話し言葉について学び理解を深めたいと実習を振り返る学生は少なくない。このような言葉は、「保育実践ジャーゴン」と呼ばれ、保育者が子どもとの関係のもとに保育実践において使用し、子どもとコミュニケーションを成立させる鍵となる保育者の発話であると位置づけられている（山内，2007）。また、保育の「いまここ」の文脈に根ざしているという意味から「保育文脈内言語」とも呼ばれ、保育実践の特定の文脈でのみ意味が確定される言語である。「ジャーゴン」とは、特定の職業集団の間だけで通用する特殊な職業言語であり、一般にどの職業集団にもみられ、保育現場でも用いられている言葉である。保育現場の文脈に根ざした言葉であるからこそ、全国共通ではなく、地域や園、クラス等によってさまざまな保育実践ジャーゴンが存在し、時代によっても意味や使用方法が異なったりする。この言葉を知ることが、現場を知ることや現場になれることにつながり、現場の文化を理

解することだと位置づけられている。保育者が子どもとの文脈に生きようとするならば、保育実践ジャーゴンは欠くことのできない重要な言語である。では、日本独自の表現であるとも指摘されている保育実践集団で通用する保育実践ジャーゴンは、現場でどのように用いられているのであろうか。真宮・遠藤・木浦原・花輪・依田・若林（2012）は、幼稚園、保育所実習を経験した学生へのアンケートをもとに、保育現場で用いられている保育実践ジャーゴンを場面ごとに事例分析を行っている。しかし、保育現場の特定の場面において、どのような保育実践ジャーゴンがもちいられているのか、その頻度および機能についての詳細な検討はなされてきていない。

以上をふまえ、本論文では保育現場における幼児期の話し言葉の意義と機能について、保育文脈内言語である「保育実践ジャーゴン」を詳細に分析することにより、領域「言葉」との関連から探ることを目的とする。

方 法

本論文では、保育実践の中で実際にどのような保育実践ジャーゴンが用いられているのか、その頻度および機能を検討するために、保育現場で実習を経験した学生の振り返りシートを分析し検討する。

1. 手続き

保育士資格取得に関する保育所での1回目の実習をおえた学生を対象とし、「保育実習演習」の授業において、保育実践ジャーゴンも含めた振り返りを行った。本論文では、その時に記入した「振り返りシート」の記述をもとに分析する。シートには、「保育所という場で出会った言葉（保育実践ジャーゴン）」についての項目を作成し、どのようなときに、どのように用いられていたのか、その語の意味を考え、具体的に事例を記述し振り返るようにした。なお、保育実践ジャーゴンについては、保育所実習へ行く前に受講する「保育内容言葉の指導法」の授業において学んだ内容である。

2. 対象者

保育所で実習したK女子大学の学生65名（3年次61名、4年次4名）を対象とした。実習園の地域は、千葉県、茨城県、東京都、新潟県、静岡県、栃木県であった。

3. 分析方法

保育実践ジャーゴンに関する振り返りシートの記述を、以下の3点から分析した。

分析1：保育現場における保育実践ジャーゴン出現場面の検討

分析2:「場面」別の保育実践ジャーゴン事例の検討

分析3:「場面」間の保育実践ジャーゴン事例の比較検討(共通点, 相違点)

結果・考察

結果1) 保育現場における保育実践ジャーゴン出現場面

振り返りシートに記述されていた保育実践ジャーゴン数は、270語であり、学生1人あたり平均4.2語記述していた。

これらの言葉が、保育実践のどのような場面で出現していたのかについて、保育実践ジャーゴン出現場面を検討した真宮・遠藤・木浦原・花輪・依田・若林(2012)の分類(「整列・移動」「食事」「活動前」等の18場面)を参考に、分析した結果が図1である。

分類した結果、16場面が示され、最も多い場面が「食事」場面(64語、24%)であり、「活動」場面(52語、19%)、「整列・移動」場面(48語、18%)の順に多いことが判明した。

保育実践ジャーゴンの出現場面を検討した真宮他(2012)の結果と比較すると(表1)、上位3位まで順序は異なるが、共通した場面が挙がった(全体に占める上位3場面の割合、本結果61%:「食事」24%、「活動」19%、「整列・移動」18%、真宮他(2012)62%:「整列・移動」34%、「食事」15%、「活動前」13%)。両結果ともに、これらの場面で全体の約6割を占めている。したがって、これらの3つの場面は、保育実践ジャーゴン出現率が高い場面である可能

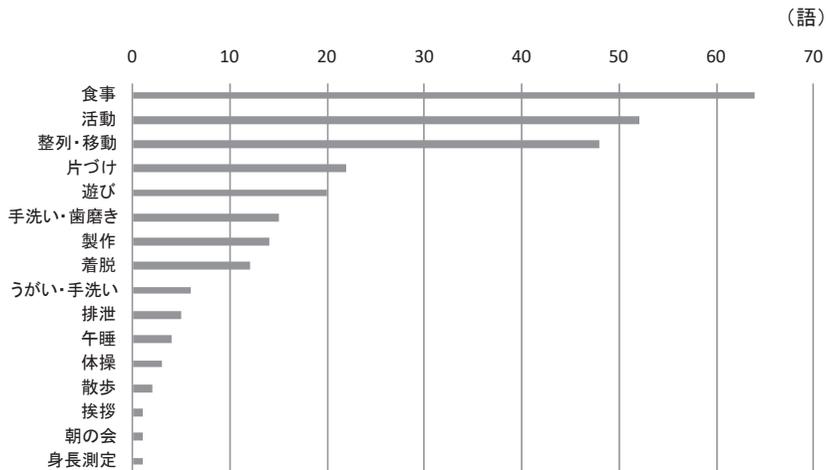


図1 実習学生が捉えた保育実践ジャーゴンの場面別出現頻度

保育現場における幼児期の話し言葉の意義と機能

表1 保育実践ジャーゴン出現場面：本結果と真宮他（2012）との比較

	本結果		真宮他（2012）	
	場面	頻度	場面	頻度
1	食事	64	整列・移動	126
2	活動	52	食事	55
3	整列・移動	48	活動前	47
4	片付け	22	着脱（靴・スリッパ）	39
5	遊び	20	製作	27
6	手洗い・歯磨き	15	片付け	22
7	製作	14	プール活動	11
8	着脱	12	着替え	9
9	うがい・手洗い	6	遊び	6
10	排泄	5	うがい・手洗い	5
11	午睡	4	午睡	4
12	体操	3	かけっこ	3
13	散歩	2	歌唱指導	3
14	あいさつ	1	落とし物	3
15	朝の会	1	排泄	3
16	身長測定	1	ダンス・体操	2
17	－	0	散歩	1
18	－	0	掃除	1

※ 斜線は、各々の研究結果でのみ取り上げられた場面である。

性が結果から推察される。

また、表1をみると、本結果では16場面、真宮他（2012）では18場面に分類され、共通場面と相違場面が示された。とくに、「身長測定」や「プール活動」等、季節や園行事との関連場面（表1斜線）が、いずれかの研究結果のみで示されている。地域や園による相違のみならず、保育現場の時期や季節、行事によっても、異なるジャーゴンが用いられていることが関係していると考えられる。

結果2) 「場面」別の保育実践ジャーゴン事例検討

結果1をふまえ、表1の2つの研究結果で上位3位を占めた場面（「食事」「活動」「整列・移動」）で出現した保育実践ジャーゴンについて、場面別に山内（2007）を参考に（表2）機能カテゴリーごとに分類し、語の意味、事例（発話・状況）、回答数をまとめ検討する（表3～5）。

表2 保育実践ジャーゴンの機能カテゴリー（山内，2007より）

機能（カテゴリー）		説明	例
子どもの文脈を 新たな文脈へ置換する （文脈置換） 「保育者-子ども」という 二者の文脈から、 子どもを別の文脈へと 「置き換える言葉」	①対象の擬人化	子どものまわりの対象物を人のように みなし、その感情や状況を伝える	ハサミが迷子だよ
	②子どものモノ化・ 動物化	子どもの動きを、動物、キャラクター、 電車などにたとえながら、具体的な動 きをイメージさせる	忍者で、ひよこさんになっ て
	③他動作への置き換え	別の身体動作を示しながら、保育者が 意図する動きを子どもに教える	おへそをこちらに向けて、 ばんざいする
	④子どもの特別呼称・ 敬称	特定の呼称や敬称によって子どもを評 価する	おそうじチャンピオン、 お片付け名人
	⑤対象の別名称化	対象を別の名称で呼び、その場にいる 人たちだけがわかる暗号のような働き をする	魔法のみず（ただの水）、 ぱっぱ（ふりかけ）
保育者と子どもとの 既存の文脈を促進する （文脈促進） 「保育者-子ども」関係を 前提としながら、 その間の文脈を促進し コミュニケーションを 円滑にしていく 「つながる言葉」	⑥動作・状態の擬態化	擬態語を用いて子どもが行う動作をわ かりやすく示す	ガラガラする、シヤカ シヤカする
	⑦幼児語の動詞化	主に3歳未満児を中心にして使用され る「幼児語+する」という形で動詞と して具体的な動きを指示する	ボンボンする（健診する）
	⑧事物の丁寧化	名詞の接頭に「お」をつけて丁寧な表 現にする	お集まり、お片付け
	⑨リズムのある掛け声	リズムにのった掛け声で、子どもの身 体動作を促す	いちに、いちに

①「食事」場面における保育実践ジャーゴン事例分析

食事場面における保育実践ジャーゴンをまとめたのが、表3である。

表3の結果から、「食事」場面では、64語の「保育実践ジャーゴン」が出現し、「あつまれ」（24語）、「もぐもぐ」（10語）の順に多く用いられていたことが示された。

保育実践ジャーゴンの機能をカテゴリー別に分類した結果、図2にも示されたように「食事」場面では、「対象の擬人化」が多く（39%）、ごはんやおかず、残っている給食を人のように「あつまれ」「飛ぶ」と擬人化し、その状況を伝え、「あつまれ」という言葉が多く用いられていたことが判明した。次に、「動作・状態の擬態化」が多く（37%）、食べ物を噛む動作を「もぐもぐ」「もぐもぐかみかみ」「あむあむ」、飲み込む動作を「ごっくん」と表現し、姿勢よくするよう「お背中びっ」と伝えその状態を導き、ご飯を一か所に集める動作を「かりかり」、スープをかきまぜる動作を「まぜまぜ」、お皿にご飯粒一つ残さず食べた状態を「ぴかぴか」、食器を重ねる動作を「がっしょん」、ふきんをたたむ動作を「ばたんばたん」と伝える等、擬態語を用いて子どもが行う動作や状況をわかりやすく伝えていた。続いて、「他動作への置き換え」

保育現場における幼児期の話し言葉の意義と機能

表3 「食事」場面で出現した保育実践ジャーゴン

カテゴリー	回答数	保育実践ジャーゴン	意味(考え)	事例(発話, 状況)	回答数
①対象の擬人化	25	あつまれ	ご飯粒をまとめる, ご飯粒やおかず, 残っている給食を一か所に集める お皿の中身を集めて, 子どもが食べやすいようにする	<ul style="list-style-type: none"> • 子どものお皿にご飯が残っていて, その残ったご飯を保育者や実習生に「あつまれして」と言っていた(子→保・実) • 子どものお皿にご飯が残っていて, その残ったご飯を保育者や実習生に「ごはんあつまれして」と言っていた(子→保・実) • ご飯粒を寄せてほしいときに「集まれしてください」と頼まれた(4歳)(子→実) • 給食のとき, まだご飯粒が器についでいたり, お皿に食べ物(野菜)が残っていたときに子どもに「あつまれあつまれしようね」と声をかけていた(保→子) • 給食のとき「集まれして手伝ってあげるね」と言っていた。(保→子) • ご飯やおかずがお皿に散らばって子どもが食べづらそうにしていたとき「あつまれしようね」(保→子) • 「たくさん食べたね。集まれるから, もう少しがらばってみよう」(保→子) 	24
		お口へ飛ぶ	子どもが口をあけてごはんを食べるため	給食のとき, 食べ物を一口分のせたスプーンを持って「○○ちゃんのお口へ飛んでいけー!」。(保→子)	1
⑥動作・状態の擬態化	24	もぐもぐ	食べ物をよく噛むことがもぐもぐであらわされている, 咀嚼する, 口を動かすこと	お昼ご飯の時間, 保育者が子どもたちに「もぐもぐ口を動かしてよく食べてね」と声をかけていた。(保→子) 2歳児の給食中, よく噛んで食べてほしいときに「もぐもぐ」と言っていた。(保→子)	10
		もぐもぐかみかみ	食べ物を噛んで食べることあまり噛まずに飲み込んでしまったり, 口の中に食べ物があるまま話してしまわないように言っていたのだと思う 1歳児くらいだと, とくに口の中に入っているのに次々入れてしまうので, よく噛んで食べてね, という意味で使っていたのだと思う。	保育者が子どもによく噛んで食べることを伝えるだけではなく, 子どもが食べ物を口に入れると子どもの口の動きにあわせて「もぐもぐかみかみ」と言っていた。子どもは自分の口の動きにあわせて「もぐもぐかみかみ」を言われることで, どのような意味なのかわかりやすく伝わりやすいと思う。(保→子) よく噛んで食べるよう伝えるために「もぐもぐかみかみ」してねと言っていた。(保→子) 子どもたちが自分でご飯を食べたり, 援助したりするときに「もぐもぐかみかみしようね」と言っていた。(保→子どもたち)	3
		びかびか	お皿にご飯粒一つ残っていない様子, 残さず食べること	きれいに食べられたとき, 器が空になっているのを見せながら「びかびかになったね」, 「お皿びかびかにしよう」と言っていた。(保→子)	3
		ごっくん	飲み込むこと	「ごっくんがらぼう」と子どもに言っていた。(保→子)	2
		あむあむ	食べ物をかむこと	子どもが噛んでいるときに「あむあむ」と言っていた。(保→子)	1
		お背中ぴっ	姿勢をよくしてほしいこと(子どもにわかりやすく伝えるため)	給食を食べる前に, 先生が「お背中ぴつてしようね」と言っていた。(保→子)	1
		がっしょん	食器を重ねること	「がっしょんしてね」といって食器を重ねていた。(保→子)	1
		かりかり	ごはんをスプーンで1か所に集めること	「スプーンでかりかりしてね」と言っていた。(保→子)	1
		ばたんばたん	ふきんたたみ方を伝えている	「ばたんばたん」と言いながら, ふきんをたたむ。(保→子)	1
		まぜまぜ	スープなどでかき混ぜること	「まぜまぜしようね」と言っていた。(保→子)	1

カテゴリー	回答数	保育実践 ジャーゴン	意味(考え)	事例(発話, 状況)	回答数
③他動作への置き換え	7	おてておひざ (手はおひざ)	手を膝に置いて待つよという意味静かにまつこと	「おててはおひざ」と言うと、子どもが静かに待っていた。〈保→子〉	2
		おててばちん (ばちん)	手を合わせること	保育者が「おててばちん」というと手を合わせ「いただきます」「ごちそうさま」と子どもたちが声をそろえて言っていた。〈保→子〉	2
		おてて パッキューン	人差し指と親指を立てて、その間にスプーンをおいてもつというスプーンの持ち方をわかりやすく説明している	「おててパッキューンだよ」といって、スプーンをもっていた。〈保→子〉	1
		バーン、 パキュン	箸の持ちかたをわかりやすくするため	「バーン、パキュンでもったかな？」〈保→子〉	1
		机とおなか がべったんこ	食べるときに姿勢がよくなるように	「机とおなかべったんこになっているかな？」〈保→子〉	1
⑦幼児語の動詞化	3	あーん	口をあけること	保育者が子どもに対してスプーンを向けながら「あーん」「あーんしてね」と言っていた。〈保→子〉	2
		うまうま	「おいしいね」という意味なのではないか	「うまうまだね」と言っていた。〈保→子〉	1
⑧事物の丁寧化	2	お集まり	食べ残ったごはんつぶ等を、スプーンやはしを使ってまとめてから食べるため、一つの場所に集める。集まるということからお集まりと使うのではないかと考える。 子どもたちが残さずきれいに最後まで給食を食べるように、お集めといいながらお皿に残ったおかずを集めているのだと思う。	お昼の時間、お茶碗やお皿の中に残った食べ物をみせながら「お集まりして」と子どもたちが言っていた。また保育者も「お集まりして最後まできれいに食べようね」と声をかけていた。(子→、保→子) お皿にちらばったおかずを上手に1か所に集め、「お集めてください」と言う。(保→子)	2
②子どものモノ化・動物化	1	ワニさんのお口	大きく口を開けること	「ワニさんのお口で食べようね」と言っていた。〈保→子〉	1
⑤対象の別名称化	1	ごはんちゃん	給食を食べ終える時間を伝えるときに使う(保育室の時計にごはんちゃんの絵が貼ってある)。	「もうすぐ、ごはんちゃんだよ」と時間を伝えていた。〈保→子〉	1
その他	1	もったもった	-	-	1
					64

※表中の〈子→保〉は子どもが保育者に対して、〈保→子〉は保育者が子どもに対して、〈子→〉は子どもが誰かに対して発した保育実践ジャーゴンであることを示す。

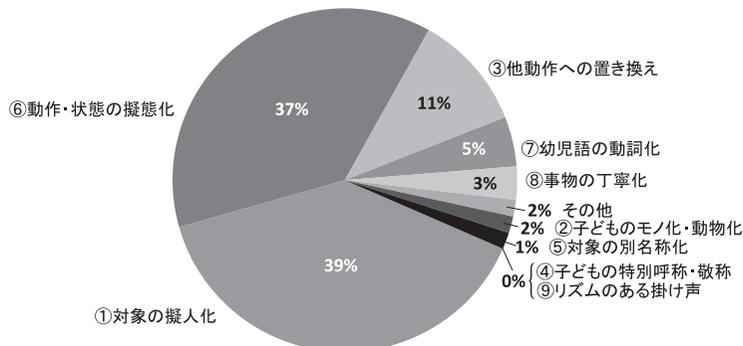


図2 「食事」場面における保育実践ジャーゴンカテゴリー

(11%)では、静かにまつことを「おてておひざ」、手を合わせることを「おててばちん」、スプーンや箸の持ち方を伝えるときに「おててバッキューン」「バーン、バキュン」、食べるときの姿勢がよくなるよう「机とおなかへぺったんこ」と別の動作を示しながら、保育者が意図する動きを子どもに伝えていた。続く「幼児語の動詞化」(5%)では、口をあけることを「あーん」、おいしいことを「うまうま」と具体的な動きを伝えていた。わずかにみられた「事物の丁寧化」(2%)では、残った食べ物を一か所に集めるのに「お集まり」と接頭に「お」をつけて丁寧な表現で伝えていた。そして1事例しかみられなかったが「子どものモノ化・動物化」では大きく口を開けることを「ワニさんのお口」とワニに例え具体的な動きをイメージさせたり、「対象の別名称化」では時計の数字のところに絵を貼り「ごはんちゃん」と数字ではなく別の名称で呼び、クラスの人たちだけがわかる記号となっており、絵を用いて視覚的に子どもへ伝える工夫がなされているようである。

記述をみると、「子ども」や「子どもたち」と表記されていることがわかる。このことからこれらの語は、1人の子どもに対して、もしくは集団(クラス全員、複数の子どもたち)の子どもたちに対して用いている場合があることが推測される。

また事例を詳細にみても、保育者が子ども(子どもたち)に対して保育実践ジャーゴン(表中の〈保⇒子〉事例)を用いるばかりではなく、子ども(子どもたち)が保育者や実習生、他児に対して「あつまれ」「お集まり」の保育実践ジャーゴン(〈子⇒保, 子⇒保・実, 子⇒〉)を用いていることもみいだされた。

さらに、事例をみても、「1歳児くらい」「2歳児」「4歳」(表の下線)という記述にみられるよう、異なる年齢の食事場面で用いられていることや、発達に応じた対応、援助として用いられることを察することができよう。

②「活動」場面における保育実践ジャーゴン事例検討

次に、「活動」場面における保育実践ジャーゴンをまとめたのが、表4である。

表4の結果から、「活動」場面では、52語の「保育実践ジャーゴン」が出現し、「ぞうさんのお耳」(5語)が最も多いが、特定の語が頻出するというよりは多様な語が用いられていることが示された。

カテゴリーに分類した結果からは、図3にも示されたように「子どものモノ化・動物化」が最も多く半数を占め(50%)、静かに集中して聞くことを「ぞうさんのお耳」「お口ミッフィー」、静かにすることを「忍者になる」「お口ミッフィー」「お口チャック」、体育座りすることを「お山さん座り」「三角おやま」「三角ずわり」、正座することを「お母さん座り」、小さな声で話す

表4 「活動」場面で出現した保育実践ジャーゴン

カテゴリー	回答数	保育実践ジャーゴン	意味（考え）	事例（発話、状況）	回答数
②子どものモノ化・動物化	26	ぞうさんのお耳	静かに集中して聞く、集中して聞くこと	「ぞうさんのお耳はどこかな？」と聞いて聞くよう話していた。〈保⇒子〉 「ぞうさんのお耳できいてね」と子どもへ言っていた。〈保⇒子〉	5
		お口ミッフィー	静かに話しを聞くときに、保育の場で使用されていた。 ・ミッフィーちゃんの口が×印になっていることから、静かにするという意味 ・口の前で×をつくることで話しをしないということが伝わるようになっていて、ミッフィーは口が×になっているためそのように言われていると考える。	指で×をつくり、「お口ミッフィー（ちゃん）！」と声をかけていた。〈保⇒子〉 ・「みんなミッフィーのお口はどうやるの？」と確認していた。〈保⇒子どもたち〉	4
		お山さん座り	子どもに「体育座り」といってもわからないから、膝を立てることを山と見立てて表現している ひざをまげて座ることを「おやまずわり」と伝えていた。	・「おやまさん座りしてね。」〈保⇒子〉 ・「おやま座りしてね。」〈保⇒子〉 ・先生の周りに「おやまずわり」で座ってねと伝えていた。〈保⇒子どもたち〉	4
		お口チャック	静かにする、お口は閉じるという意味	お口チャックで待つよ、「お口チャックだよ！」〈保⇒子〉	2
		ありさんの声	小さい声で話すこと	「ありさんの声でね」〈保⇒子〉	2
		忍者になる	おしゃべりをやめ、静かにすること	「話しを聞くから忍者になるよ」〈保⇒子〉	2
		うさぎさんの声	普通の声で話すこと	「うさぎさんの声でお話するよ」と子どもたちに伝えていた。〈保⇒子〉	1
		お母さん座り	正座をすること	「お母さん座りをしましょう」と子どもに言っていた。〈保⇒子〉	1
		三角おやま	体育座りのこと	「三角おやまさんだよ」〈保⇒子〉	1
		三角座り	「体育座り」ではわからないので、三角の形で伝え、ただしっかり聞きましょうではなく、姿勢をよくし、自分で考えて、注目してもらえるようにしていた。	「三角座りかっこいい人誰かな？」「お山作れているの誰かな？」〈保⇒子〉	1
		ぞうさんの声	大きい声で話すこと	「ぞうさんの声でね」と子どもたちに大きな声をだすよう言っていた。〈保⇒子〉	1
		手をくまさん	-	「手をくまさんにしてね」〈保⇒子〉	1
		ねずみさんになる	ネズミは小さいから、子どもがイメージしやすいように動物に例えている（声のボリューム）	「ねずみさんになりましょう」と言っていた。〈保⇒子〉	1
		⑥動作・状態の擬態化	11	おせなかびーン	子どもたちが姿勢よくなるよう、背中をビーンと伝えて伝えるのだと思う。
お背中べったん	背中にかべをつける・つけて座ること			「お背中べったんしてね」と言っていた。〈保⇒子〉	2
背筋ビーン	静かに待つ、姿勢をただすこと			「背筋ビーンとしてね」〈保⇒子〉	2
おいすとん	イスに座ること			「おいすとんしてね」〈保⇒子〉	1
おしりべったん	どこかに座ること			「おしりべったんしてね」〈保⇒子〉	1
おててパー	手をパーに広げること			「おててパーだよ」〈保⇒子〉	1
おなかべったん	お腹を机につけて座ること			「おなかべったんしてね」〈保⇒子〉	1
壁ベッタン	壁に背中をつけて座ること			「壁べったんしてね」〈保⇒子〉	1

保育現場における幼児期の話し言葉の意義と機能

カテゴリー	回答数	保育実践 ジャーゴン	意味（考え）	事例（発話、状況）	回答数
③ 他動作への置き換え	6	おへそビーム	おへそを保育者の方に向けて、保育者の方へ身体を向けること	保育者が話しをするとき、子どもたちに「おへそビームして」と促していた。〈保→子〉	1
		おへそをむける	先生におへそを向けて、先生の方を向くこと	「先生におへそをむけて」と言い、先生の方へ向きを変えていた。〈保→子〉	1
		かっこよく	姿勢と態度よくすること	「だれがかっこよく座れているかな？」〈保→子〉	1
		手はおひざ	静かに待つこと。静かにというよりも伝わる	「手はおひざだよ」〈保→子〉	1
		パワーためる	次の活動に向けて力をためておくこと	「パワーためてね。」〈保→子〉	1
		ビームを送る	保育者をよくみること	「ビームを送ってね」〈保→子〉	1
④ 子どもの特別呼称・敬称	4	おにいさん、おねえさん	きちんとした姿勢で、座りながら、保育者の話を聞くことができるように、下の子たちの見本となれるように伝えていると思う。	「おにいさん、おねえさんのように座っているかな？」〈保→子〉	2
		赤ちゃん	もう少しできるはずなのにと伝えるため、例えていると思う。	「赤ちゃんなのかな？」〈保→子〉	1
		〇〇組さん	2月だったので、進級クラスのこと	「あの子は〇〇組さんになれるのかな？」と進級クラスのことについて、話に集中できるようにしていた。〈保→子〉	1
⑤ 対象の別名称化	3	バツ	間違っていること、いけないこと	「バツです」〈保→子〉	1
		びっくり大作戦	保育者が少し離れたときに、子どもたちが静かにまち、戻ってきた保育者が「静か！」とびっくりするための作戦	子どもたちが自ら「びっくり大作戦をやろう！」と言い、静かに保育者を待っていた。〈子→他児〉	1
		ぼかぼかちゃん	1歳児クラス全員（クラス名）	「ぼかぼかちゃん、いいですか？」〈保→子〉	1
⑦ 幼児語の動詞化	1	たっち	立つよ	「たっちしようね」〈保→子〉	1
その他	1	手のひらと手のこうをあわせて3回ほどたたく		-	1
					52

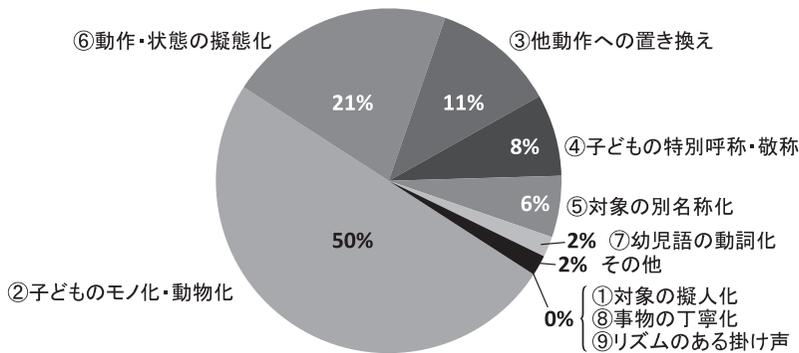


図3 「活動」場面における保育実践ジャーゴンカテゴリー

ことを「ありさんの声」「ねずみさんの声」、普通の声で話すことを「うさぎさんの声」、大きな声で話すことを「ぞうさんの声」と、子どもの動きを動物、キャラクター、山、形（三角）に例えながら具体的な動きをイメージできるよう伝えていた。次に、「動作・状態の擬態化」が多くみられ（21%）、背中を伸ばす動作を「おせなかぴーん」「背筋ぴーん」、背中を壁につけて座る動作を「お背中ぺったん」「壁ぺったん」、いすなどに座る動作を「おいすとん」「おしりぺったん」、手を広げる動作を「おててぱー」、おなかを机につけて座る動作を「おなかぺったん」と擬態語を用いて子どもが行う動作をわかりやすく表現していた。

続いて「他動作への置き換え」（11%）では、保育者の方へ身体を向けることを「おへそビーム」「おへそをむける」、姿勢をよくすることを「かっこよく」、静かにまつことを「手はおひざ」、保育者をよくみることを「ビームを送る」、次の活動に向けて力をためることを「パワーためる」と別の身体動作を示し子どもに保育者の意図する動きを伝えていた。そして「子どもの特別呼称・敬称」（8%）では、「おにいさん、おねえさん」「赤ちゃん」「〇〇組さん（進級クラス名）」と特定の呼称や敬称によって表現していた。「対象の別名称化」（2%）では、まちがっていることを「バツ」、保育者を驚かせる取り組みを「びっくり作戦」と子どもたちが呼び、自分のクラスみんなのことをクラス名（ほかほか組）で「ほかほかちゃん」と、別名称で呼びその場にいる人たちだけがわかる記号となっているようである。「幼児語の動詞化」（6%）では、たつことを「たっち」と言い、具体的な動きを伝えていた。その他として、話し言葉ではなく手の動きが記述されていたのであるが詳細は不明である。

記述をみると、「食事場面」同様、「子どもたち」「みんな」「この中に」ということから一人ひとりの子どものみならず、子ども集団に向けて発せられた言葉も含まれていることがわかる。さらに「2月」というように、特有の保育月に用いられる可能性のある語も示されていた。

また事例を詳細にみると、ほとんどが保育者から子ども（子どもたち）に対して用いられた発話であったが〈保→子、保→子どもたち〉、子どもたちが他児へ用いていた「びっくり大作戦」〈子→他児〉という「対象の別名称化」がみられた。

③「整列・移動」場面における保育実践ジャーゴン事例検討

整列・移動場面における保育実践ジャーゴンをまとめたのが、表5である。

表5の結果から、「整列・移動」場面では、48語の「保育実践ジャーゴン」が出現し、「忍者（さん）」（13語）、「（お）壁ぺったん」（10語）の順に多く用いられていたことが示された。

カテゴリー分析した結果、図4にも示されたように「子どものモノ化・動物化」が最も多く6割を占め（61%）、静かに素早く動くことを「忍者（さん）」に例えたり、一列に並び移動す

保育現場における幼児期の話し言葉の意義と機能

表5 「整列・移動」場面で出現した保育実践ジャーゴン

カテゴリー	回答数	保育実践ジャーゴン	意味(考え)	事例(発話, 状況)	回答数
②子どものモノ化・動物化	29	忍者(さん)	忍者のように気づかれないように、忍び足で静かに素早く動くこと 忍者と表すことで子どもたちにもわかりやすく、今は静かにしなくてはいけないという意味だと伝えること 忍者になりきることで子どもたちが楽しく行動し、静かに移動できるようにしている。5歳児クラスのみんが集中して製作をしていたから静かにするようにだと思ふ。 静かにということ忍者のようにと例えることで、子どもたちは抜き足、さしあし、と静かに音をたてないように意識できていた。	午睡で保育室からホールへ移動するときに、保育士が「忍者になって静かに移動するよ」など声かけをしていた。(保→子) 「忍者になるよ」「忍者になって歩くよ、忍者歩き」(保育者が「しーっ!」と口に手をあてて忍者の真似をしながら忍び足で走る) (保→子) 保育者が子どもたちに「もうジャガイモ組さん中で寝ているから、忍者みたいにはいってね」と言っていた。(保→子)	13
		電車になる	一列に並ぶこと、一列になって歩くこと、整列すること 子どもたちが上手に1列に並ぶ(整列する)ことができるように、電車にたとえているのだと考える。また、子どもたちも楽しく並ぶことができるようにと考えているのだと思ふ。「きれいに並ぼう」「まっすぐ」という言葉よりも、3~4歳の子どもにわかりやすい言葉でまっすぐを電車と例えていたのだと思ふ。	子どもたちがテラスに順番に集まって並んでいたが、バラバラになってしまったとき「テラスに電車になるよ」「電車さんになろうね」と1列になり前の子の肩をもって電車のように移動していた。(保→子) なかなか子どもが動こうとしないときに「電車になって」「電車で行こうね」と言い、一緒に特定の場所に向かっていった。(保→子) 「電車みたいに並んでね。電車さんにならないと出発できませんよ」と伝えていた。(保→子)	7
		へび(さん)になっている	列が乱れていること、まっすぐに並んでいないこと	「蛇さんになっている」と言いまっすぐ並ぼうねということ子どもたちにわかりやすく伝えていた (保→子)	4
		きしゃぽっぽ	並んで移動すること	「きしゃぽっぽでいよ」(保→子)	1
		口チャック	静かに、話さないようにすること	部屋を移動するとき「口チャックして」と保育者が言っていた。(保→子)	1
		列車さんになる	一列に並ぶこと	「列車さんになってね」(保→子)	1
		ロケット	高く飛ぶこと	「ろけつとみたいに!」(保→子)	1
		ワンワンのポーズ	後ろ向きハイハイするときの姿のこと	「わんわんのポーズだよ」(保→子)	1
		⑥動作・状態の擬態化	14	(お)壁べったん	壁にそって座ること、壁に背中をくっつけて座る・並ぶこと 「べったん」という言葉を使うことは、「くっついてね」よりも子どもに伝わりやすと感じた「かっこよく壁べったんできるかな」等と促すことで、自分から行動する子どもがいる。次の活動にうつる前に全員で落ち着くことができる。【1歳児】
(お)背中べったん	壁に背中をつけて整列する・座ること			「お背中べったん!!」「せなかべったん」(保→子)	2
おしりべったん	おしりをつけて座ること			「おしりべったんしよう」(保→子)	1
ぎゅっぎゅっ	友達を手をつなぐということ			「お友達とぎゅっぎゅっするよ」(保→子)	1
⑨リズムのあはれかけ声	4	とんとんまえ	リズムにあわせて、前にならえをしてまっすぐに整列すること (とんとんで整え、前はまっすぐ見るように) 友だちと息を合わせて整列すること	「とんとんまーえ」と声をかけ、子どもたちも「とんとん前、とんとん前」とその言葉を繰り返していた (保→子、子→) 「とんとんまえて並ぼうね」(保→子)	4
		⑤対象の別名称化	1	おててのあるところ	集まる場所のこと
					48

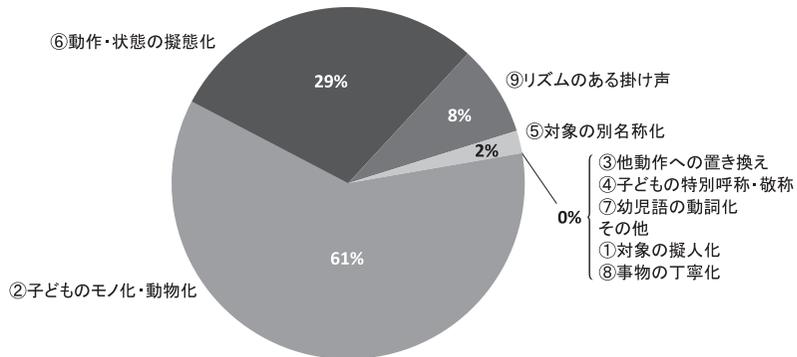


図4 「整列・移動」場面における保育実践ジャーゴンカテゴリー

ることを「電車」「きしゃぽっぽ」「列車」に、まっすぐにならないことを「へび」に、静かにすることに「口チャック」、高くとぶことを「ロケット」に、後ろ向きにハイハイするときの姿を「ワンワン」、子どもの動きを動物、電車、忍者、モノに例えながら具体的な動きをイメージさせる表現がみられた。次に「動作・状態の擬態化」が多く（29%）、壁にそって座る・並ぶ動作を「（お）壁ぺったん」「背中ぺったん」とし、座る動作を「おしりぺったん」、手をつなぐ動作を「ぎゅっぎゅっ」と、擬態語を用いて子どもが行う動作をわかりやすく伝えていた。そして、「リズムのあるかけ声」（8%）として、まっすぐ整列するときに「とんとんまえ」と、リズムにのったかけ声で子どもの身体動作を促し、「対象の別名称化」（2%）では集まる場所を子どもが製作した手形が掲示されている場所で呼び、その場にいる人たちだけがわかる記号となり、伝える工夫もなされていた。

記述をみると、「食事」「活動」場面同様、「子どもたち」「全員が」「友達と」という表記がみられ、1人の子ばかりでなく集団の子への発話がなされているようであるが、他の2つの場面に比べ「整列・移動」場面は集団で行う場面であることからこれらの表現が多く散見されるのではないかと考えられる。「1歳児」や「3～4歳児」にわかりやすい言葉で例えていたのだと思うと記されており、具体的な年齢も挙げられていた。リズムのあるかけ声もみられ、保育者とともに、子どもたちも一緒に声をだし動作を促しながら整列し移動している姿が浮かぶ。

また、「楽しく行動」「楽しく並ぶ」という言葉がみられ、「楽しみながら」整列・移動する工夫として保育実践ジャーゴンが機能していることが推察されよう。

保育現場における幼児期の話し言葉の意義と機能

表6 3つの場面で出現した保育実践ジャーゴンカテゴリ比較

カテゴリー		食事場面		活動場面		整列・移動	
子どもの文脈を新たな文脈へ置換する（文脈置換）	①対象の擬人化	25	34	0	39	0	30
	②子どものモノ化・動物化	1		26		29	
	③他動作への置き換え	7		6		0	
	④子どもの特別呼称・敬称	0		4		0	
	⑤対象の別名称化	1		3		1	
保育者と子どもとの既存の文脈を促進する（文脈促進）	⑥動作・状態の擬態化	24	30	11	13	14	18
	⑦幼児語の動詞化	3		1		0	
	⑧事物の丁寧化	2		0		0	
	⑨リズムのある掛け声	0		0		4	
	その他	1		1		0	

結果3)「場面」間の保育実践ジャーゴンについての比較検討

結果2をふまえ、3つの場面間（「食事」「活動」「整列・移動」）での保育実践ジャーゴンをまとめ（表6）、共通点と相違点を検討する。

カテゴリーを上位カテゴリー2つに分類すると、全場面ともに、保育者と子どもとの既存の文脈を促進する「文脈促進」よりも、子どもの文脈を新たな文脈へ置換する「文脈置換」の方が多くみられることが共通して示された。また、「文脈促進」のなかでは、擬態語を用いて子どもが行う動作をわかりやすく示すこと（「⑥動作・状態の擬態化」）が全場面で共通して多くみられた。

一方で、「食事」場面では、「対象の擬人化」が最も多く「食べるもの」である対象を人のようにみなして表現し状況を伝えたり、「活動」場面や「整列・移動」場面では、「子どもたちの動きをモノ化・動物化」が最も多く、子どもの動きを動物、キャラクター、電車等にたとえながら具体的にイメージを広げることが多いというように場面による相違も示された。

考 察

本論文では、保育現場における幼児期の話し言葉の意義と機能について、「保育実践ジャーゴン」を分析することにより、領域「言葉」との関連から探ることを目的とした。

まず保育実践のどのような場面で用いられていたのかを分析した結果、16場面示され、「食事」場面、「活動」場面、「整列・移動」場面の3つの場面において出現頻度が高いことが判明し、先行研究（間宮他，2012）と同様の結果が得られた。

これら3つの場面の保育実践ジャーゴンの詳細な分析の結果からは、子どもの文脈を新たな文脈へ置換する際（「文脈置換」）に多く用いていることが全場面共通して示された一方で、「食事」場面では食べ方や片づけ方、姿勢等について擬人化して伝え、擬態語をもちいて動作や状態を表現することが多く、「活動」場面や「整列・移動」場面では、子どもの動きを動物、キャラクター、電車などに例えながら具体的な動きをイメージできるようにし、擬態語を用いて子どもが行う動作をわかりやすく示すことが多い等、場面による相違も示された。

場面により相違はみられるが、全体として、保育現場において新たな文脈へ置き換える際に保育実践ジャーゴンが話し言葉として重要な機能を果たしていることが多いことが明らかになった。

また、保育実践ジャーゴンは、集団の子どもたちに対して用いられていることも示され（「子どもたち」「みんな」）、1人ひとり子どもや子どもたちに対して「保育者」が発する言葉であると同時に、「子ども」が保育者や他児、実習生に対して用いていることが新たに示された。山内（2007）の保育実践ジャーゴンの定義によると、「保育者が子どもとの関係のもとに保育実践において使用し、子どもとコミュニケーションを成立させる鍵となる保育者の発話である」と位置づけられているが、両者の関係のもとに保育実践においてコミュニケーションを成立させる鍵となる子どもの発話にもなることがみいだされたといえる。例えば、4歳の女兒が、折り紙でドングリを折っているときに「あっ、アイロンするの忘れちゃった！」と言い、「アイロン（折り目をしっかりとつけて折ること）」しやりとりしていたことを思い出す。言葉は、多様な場面の中で生まれ、やりとりされて意味あるものとして理解され、やがて自分の言葉として用いるようになっていく姿が垣間見られたといえよう。

幼児期の話し言葉の発達については、一般的な発達過程だけではなく、本論文で取りあげた保育実践ジャーゴンのような保育の場での多様な人との関わりの中で育つ言葉にも目を向けていくことは重要なことであろう。幼児が生活や遊びの中で、なんとなくその状況の中で意味を感じ取りながら、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現に触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにするということは、新たに領域「言葉」に加わった「言葉に対する感覚を豊かにする」ことにも通ずることであると考える。こうした感覚が、言葉の理解につながり、コミュニケーションにおいても用いられる言葉へと広がり、小学校以降の国語の教育の基礎が培われるまさに幼児期特有の話しことばとして意義があるといえるのではないであろうか。

最後に、本論文で取り上げた保育実践ジャーゴンと関連し、熊本県小羊保育園（2017）での実践を特筆しておくことにする。「熊本地震から学ぶ～保育のなかであそびながらできる防災訓練」の中で、非常事態は突然やってくることを考え、避難訓練時だけでなく、日ごろの遊びのなかで子どもたちが身を守り、避難時が特別な怖いときにならないように、あそびながらできる訓練として「だんご虫ポーズ」を紹介し、保育のポイントを述べている。両手で頭を押さえて小さく丸まるだんご虫ポーズを子どもたちと覚え、保育士が「だんご虫ポーズ！」といえ、即座にそのポーズをするあそびを繰り返す、保育中に、いろいろな場面でときどき「だんご虫ポーズ」といい楽しんでいると、いざ地震が起きたときに子どもたちはだんご虫ポーズで自分のからだを守ることにつながるという（0歳児も！危ない！地震だ！だんご虫ポーズ）。豪雨による川の氾濫や大地震等、予測を超えた深刻な災害があちこちで起こるようになり、新保育所保育指針では、今後に備えて、保育所の近辺で大きな災害が起こることを想定した備えや安全対策をすべての保育所できちんと行うことを各園に課し、第3章健康及び安全の4に「災害への備え」の項が新設されている。「だんご虫ポーズ」は「子どものモノ化・動物化」に該当する保育実践ジャーゴンであるといえよう。保育の生活や遊びの中で出会いながら、様々な場でいかされていくことも考慮にいれ、意図的に導入することも必要かもしれないということを考えさせられる。

今後は、保育現場における多様な場面や子どもの発達との関連等から分析を進め、話し言葉のみならず動きが伴っていた事例（例、「おててバッキューン！」と人差し指と親指をたてる手の動き）も含めて検討し、コミュニケーションの起源（Tomasello, 2008）や保育現場における乳幼児期の言葉の意義と機能を検討していくことを課題とする。

引用文献

- 熊本県小羊保育園（2017）「熊本地震から学ぶ～保育のなかであそびながらできる防災訓練」、『新たに示される保育指針とこれからの保育』保育の友、第65巻、第5号、p63
- 真宮美奈子・遠藤愛実・木海原えり・花輪真衣・依田麻里江・若林沙耶（2012）保育実践ジャーゴンの活用に関する研究―場面ごとの事例をもとに―、山梨学院短期大学研究紀要、52、pp125-133
- 無藤隆・汐見稔幸・砂上史子（2017）ここがポイント！3法令ガイドブック：新しい『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の理解のために、フレーベル館
- Tomasello, M. (2008) *Origins of Human Communication*. MIT Press. MIT Press.
- 山内紀幸（2007）第4章 保育ジャーゴンの研究：社会文脈実践家としての保育者、pp192-222、磯部裕子・山内紀幸、ナラティブとしての保育学、萌文書林